
エウロパの旅人 日本再生篇

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エウロパの旅人 日本再生篇

【Nコード】

N0921Y

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

地軸のずれにより舞い上がった粉塵は収まりつつあったものの、日本は南極の座標に位置したままだった。東北のカリスマ 伊都淵の指示で丈は生まれ育った農園へと向かう。待ち受ける異形の脅威、氷のドームの建造、生存者の搜索と多くの使命を果たすには気弱過ぎる青年である丈を、農園の仲間達が、石田真由美が支える。次の衝撃波は襲ってくるのか？ そして日本の未来は

檻の中の惨劇（前書き）

エウロパの旅人 日本再生篇の連載を開始します。前作にはたかさんのアクセスをいただき、大変ありがとうございました。本作もお読みいただけますれば幸いです。

檻の中の惨劇

「気をつけてな」「誠に宜しく」 イツテラツシャイ と、口々にプラス意識にかけられた言葉に送られて僕は杜都市を後にした。全長6・3mのホバークラフトに積み込まれた荷物は液化ガスのタンクであったり農園に届ける食料であったりで、それらは7人乗りの客室を取り去った2/3を占めていた。

伊都淵さんと依子さんが作ったというホバーは、僅かな斜面や路面の凹凸さえもが障害となるエアクッションタイプとは異なり、地軸のずれにより安定した磁気を浮力と推進力に利用している。これなら非力な女性でも軽々と引けることだろう。しかし……

往路で救出を約束した石田さん一家をピックアップする予定のプランは、犬達に引かせた橇を僕が颯爽と先導するという構想であり、僕が犬の代わりをするのは計算に入っていない。井ノ口市を発った時同様、気の利いた台詞で杜都市の人々に別れを告げることが出来なかったのは、それが理由でもあった。

忘れていた。氷の檻に閉じ込めたアイスギャングどもが居たではないか。奴等が改心していれば助け出してホバーを引かせればいい。妙案が浮かんで上機嫌となった僕は、鼻歌混じりにホバー先端に備えられた発電表示計を振り返る。船体全面に張り巡らされたソーラーモジュールの総発電量は0・4kW、磁性発生器を作動させるのがやつとといったところだった。明るくなつたとは言え、日射のないこの状況ではやむを得ないのだろう。

僕の脳味噌はイトペディア（伊都淵さんに詰め込まれた脳内ウィキペディア）で一杯になっていた。彼の言葉が蘇る。

諸外国にも生存者は居るだろう。先進国ならトコロログリアに似たものを開発していたかも知れないし、立派なシェルターを持つていたはずだ。それでもあの衝撃波だ、生存者は多くて全人口の3パーセントといったところだろう。氷河期のようなこの気象条件

が、その数字を減少させている可能性もある。当面、他国からの援助は期待出来ない。君が一人でも多くの人を救うんだ。そして彼等が暮らしてゆける環境を作れ

半月前までしがたない小学校教諭だった僕が随分と大役を仰せつかってしまったものだ。だが、僕がやらねば誰がやる。そんな気になつていたのも確かだ。一步やマリアに速度を合わせる必要のなくなつた今、時速60km/hでの巡航が可能だった。予定通りなら往路の半分、三日もあれば農園に着く。母さん、そしてみんな、待つてくれ。僕は氷を蹴る足に力を込めた。

しかし、一人旅は寂しいものである。話し相手はおるか意識を遣り取りする相手もなしで4時間も氷を蹴り続けていると、人恋しさに気が狂いそうになる。そんなんじゃ長距離トラックのドライバーは勤まらないって？ 対向車もなければサービスエリアにもひとつこひとり居ない状況を想像してみるといい。4時間が10時間にも20時間にも感じられることを知るだろう。新潟中央ジャンクションのバンクも速度を落とすことなく駆け抜ける僕の胸には愛おしい石田真由美嬢の面影が……って、つい半月前に妻子を亡くした男の言う台詞ではないな。電子望遠鏡並みの視力を開放しても、氷の山々が邪魔をして彼女達を残してきた氷のホテルどころかアイスギヤングを閉じ込めた氷の檻にさえ視程は届かない。今日はここまでにしておこう。僕は氷でツルツルになった高速道路脇にホバーを寄せて電源を落とした。ソーラーモジュールをスライドさせた荷物に占拠されていない部分には低反発素材のマットが敷かれている。簡易ベッドは快適でソーラーの屋根を閉めれば風雪もしのげる。しかし寂しさは埋まることはなかった。

脳細胞のひとつひとつを自分の分身として認識せよ

つまり、生存本能を司る部分だけ起こしておいて体温調整と危険回避に努め、他の部分は休めろということだ。伊都淵さんから植え付けられた知識は就寝時に関する注意事項までこと細やかなものだった。

たった三時間程の睡眠で身も心もリフレッシュされた僕は、すごく快適に目覚めた。

起きている時は不寝番を休ませてやること

その言いつけを守るべく、生存本能組に休暇を与えてやる。彼は自分の脳細胞を何と呼んでいたっけ……そうそうオイラーズだ。自分の脳細胞と語り合うなんざ分裂症患者に近いのではないかと、とボクラーズに問い掛ける僕が居た。何をかいわんやである。ともあれ今日中に石田さん一家を残した氷のホテルにはたどり着いておきたい。僕は出発の準備を始めた。

人間 今の僕がそう呼べるなら 文明などなくても生きて行けるものだ。脳味噌の使い方に精通するだけでいいのだから。遠くだっただけに見えるしバイオナビ機能が目的地まで方向を間違えることなく案内してくれる。犬や熊とだっただけで意思疎通を図れるし、人工筋肉なしでも相当な力を発揮することだっただけで出来るそうだ（これまた伊都淵さんの知識だった）。ただ孤独は辛い。人が生きて行く上で一番大切なものは語り合い笑い合える仲間がいることなのだ、と僕は身に染みて感じていた。

とにかく退屈なのである。江戸時代の飛脚はよくもこんな孤独行に耐えていたものだ。石田一家の救出ありアイスギャングとの遭遇あり、そして高飛車な犬と母性本能の塊のような熊、彼等との会話があった往路とは打って変わって見事に何の変化もない復路だった。時間短縮のため速度を上げることも考えたが、ローラーブレードのベアリングが過熱して保たないだろう。高速道路の追い越し車線を、マイペースな婆さんの乗った車の後ろについて走るようなストレスを感じており、今やアイスギャングとの再会すら待ち遠しくて仕方のない僕であった。氷の檻までの距離は約80km、後一時間とちよいで到着する。

4kmほど先の氷の檻が見えてきた頃、僕を強烈な臭気が襲った。何だこれは？ アイスギャングどもが食い散らかした缶詰の始末を

していなかったにせよ、そう簡単に腐敗が進むはずはない。なにせ気温は氷点下なのだから。臭気には鉄臭さも混じっていた。堪え性のない若者達が食料を争って殴り合いでもしたのだろうか？ と、ほんの一週間程前まで彼等同様堪え性のなかった僕の緩い思惑とは裏腹に、頭に鳴り響くアラームは第一級の警戒警報を発令していた。

ひどい……血溜まりの中に五人のアイスギヤングが横たわっていた。凶器となりそうなものは空き缶のプルタブぐらいしかなかったはずなのだが、仰向けに横たわったのも俯せになったのも、その体からは内臓がすっぽりとなくなっていた。誰がこんな……想像もつかないほどの惨劇が氷の檻の中で繰り広げられたようだった。

その時 空気が動いた。

醜悪のハイブリッド

何だ？ 氷の丘 往路で、今や物言わぬ屍となったアイスギヤング達が姿を現したその丘の向こう、カシヤカシヤと耳障りな音が聞こえてくる。その音はこの手前4km地点で嗅いだのと同じ臭気と共に近づいてきていた。僕は氷の檻の上に立って音のする方に視線を向ける。ほどなくして丘の頂上に黒光りした体表を持つ十体ほどの何かが姿を現した。

熊でも犬でもない。強いていうなら日焼けサロンで焼き過ぎた人間が四つん這いに伏せたような姿勢でこちらの様子を伺っている。僕は気味悪さで全身が総毛立つのを覚えた。

君は全身が武器だから と、伊都淵さんから何の武器も与えられていなかった僕にとって、未知の生物との遭遇は混乱を招く意識を探ろうと送るどの周波数帯にも相手の反応はなく、強く感じるのは飢餓感と攻撃性のみ。本能のみが奴等の行動原理となっているようだった。

ボクラーズに脳内検索を託すとイトペディアが起動する。昆虫アレが？ 昆虫といえばカブト虫か蝶といったほのぼのとした種目しか思いつかない僕にとつて、目の前の醜悪な存在がどうにもイメージと重ならない。ボクラーズが次なるイメージを提起してくる。ゴキブリだつて？ しかし丘に伏せた奴等の顔らしき部分は人間のそれで、微かに聞こえる呼吸音に合わせ黒く隆起する背中が上下している。気門から酸素を取り込む昆虫類は絶対にそんな呼吸法はない。

『ハイブリッド』『トランスジェニック』立て続けに二つの単語が転がり出てきた。

人間にゴキブリの遺伝子導入がなされたのか 信じられないがそうとしか考えられない外見だった。薄明かりの中、奴等はじわじわとこちらに向かって移動を始めた。体表を鈍く光らせて。敏捷

さがゴキブリほどでないのは膂力が人間のそのままなのか。外骨格動物では有り得ないサイズを実現するため、そして肉体の統合性を保つために全ての遺伝子情報を取り込めなかったのだろう。ついでに奴等が飛べないのも確信した。四足歩行をする奴等の背中に上翅は見当たらなかったのだ。

のんびり生物学の講義をしている場合ではない。何せ第一陣が移動を始めた途端、丘の上には同数の第二陣が準備を整えていたのだから。どれだけ居るんだ奴等は……ええいままよ、ゴキブリならこれで撃退出来るだろう。僕は声帯域を通る音波を23000Hzに固定した。

人間ゴキブリ　ゴキブリ人間？　この際どっちでもいい。一瞬間ゼンマイが切れたように動きを止めた奴等はそそくさと後退を始める。よく見ると腕にあたる部分のすぐ下辺りから一對の節足状のものが生えている。どこの誰があんなデタラメな生き物を作ったんだ……第一陣の撤収が始まると丘の上にあった陣形も姿を消していた。統制はとれているようだ。微かだが意識に引っかけた脳波の残滓らしきものを解析する。なんと漢字が混ざっているではないか、奴等はメイド・イン・チャイナだったのか……

莫大な政府財務を抱えながらもプライドだけは高いアメリカが、例え生き残るためとはいえゴキブリの遺伝子導入などするはずはない。あの恥知らずな将軍様の居た特異な思想の国にそれほどの科学力はない。ギリシヤに始まった財政破綻が蔓延していたEU諸国にも無理だろう。オイルはふんだんにあるが専らテロにご執心だった国々は宗教には従順だ、遺伝子操作は神への冒瀆、蔑むべき行為だと認識していたはずだ。伊都淵さん流消去法が奴等の正体を明らかにしていた。

『事実は小説より奇なり』とはよく言ったものだ。デイ・アフター・トゥモローにもウオーカーにも、こんな奴等は出てきやしなかった。まったくあの国の強欲さと来たら底なしだな、世界中の資源を買い漁るだけでは彼等の欲望は満たされなかったというのか。ああまで

して生き残ろう、世界の支配者たろうとする彼等にとって、この氷で閉ざされた世界で一番大切な資源は食料となったのだろう。それを求め氷で繋がってしまった海を渡ってきたのか。

その昔、父さんはいっていた。祖父が少年だった頃、島国日本は自国にない資源を確保（略奪）しようとして中国に攻め行ったそうだ。有史以来、人類の歴史は侵略と被侵略が繰り返されてきた訳で、今回はたまたま中国が侵略者となっただけのことなのだろう。なんだから僕は物分かりのいい好々爺になってしまったようだ。

いけないっ！

僕は石田さん一家のことを思い出した。伊都淵さんの言うとおり地球上の人工のたった2〜3パーセントが生存者だったとしても、それが中国なら2600万人が生存している計算になる。そのうちのどれだけが人間ゴキブリとなり、どれだけがこの国に渡ってきているかはわからない。だがあの様子なら目にした生存者を手当たりしだいに食料に変えていただろう。四本足は机以外、空を飛ぶものは飛行機以外何でも食べるといふ悪食この上ない民族なのだ。僕は氷の檻を飛び降りて先を急いだ。希望と秩序の明かりが灯り始めたこの氷の台地に、嵐の予感を感じ取っていた。

Optimist (楽道家)

遅かったか……

駒ヶ岳サービスエリアに作った氷のホテルの中に人影はない。僕は落胆に肩を落とした。多少、時間はかかっても彼等を同行させていれば……悔恨は尽きることなく僕の胸に溢れてきた。氷の檻で見たような血痕はなかったが、積み上げられていたはずのダンボール箱は散乱し、中身のなくなつた缶があちこちに放り出されている。

「血液型は整頓好きのAだ」といつた真由美さんとその母親が居て、この散らかりようはない。組織的に襲撃を仕掛けてきたゴキブリ人間どもの数を思い出す。人の良さそうな父親だけが男性のパーティーでは、奴等の急襲に為すすべなく保存食として連れ去られたと考えるのが自然だった。僕の背中が見えなくなつても手を振り続けてくれた真由美さんのチャージミングな顎のホクロが記憶の中でクロースアップされていた。

僕は、はたと気づいた。緊急避難用にと石田一家に教えておいた、掘り起こし放置されたままの地下タンクがあつたはずだ。一縷の希望に縋つて氷のホテルの裏手へと回つた。誰かひとりだけでも助かつていてはくれないものかと。

「石田さん、居ませんか？」

加減して叩いたつもりだが屋外に放置され錆の吹き出した地下タンクは大きく凹んでしまふ。耳を済ませてみるが反応はない。僕はもう一度肩を落として回れ右をした。その時だった。常人の感覚では捉えられないほど小さな空気の揺れを感じた。タンクに登つて点検口に被せられた直径50〜60cmほどの蓋を開くと、聞き覚えのある涼やかな声が僕の耳に届いた。

「小野木……さん？」

「そうです。ご無事でしたか？」

真由美さんの心細げな顔が僕の照らすLEDランプの中に浮かび

上がる。彼女は手をかざし、顔を横に振った。残念ながら眩しかったのは僕の笑顔ではなかったようだ。

「ご両親は？」

「寝てます」

僕は円筒形のタンクから滑り落ちそうになった。この状況でよくも寝ていられるもんだ。しかし何故ここに？ 緊急用とは告げてあったがゴキブリ人間どもが襲ってきてからでは、ここまで逃げてくる余裕などなかったはずだ。そのままの疑問を真由美さんにぶつける。

「世界がこんなになっちゃったのに、お父さんったらビールを飲みたがって仕方なかったんです。最初のうちは母も大目に見ていましたが、そのうち1本が2本になりで……」

石田博氏が無類のアルコール好きだったのは救出した時の様子から分かつてはいたが、死んだ父同様、さほどアルコールに強くない僕に、所謂？大酒飲み？の気持ちは理解出来ない。

「怒った母がビールの箱をタンクの中に放り込んだんです。

そうしたら父は、万が一のためにタンクに入れるかどうか試してみよう、と言い出して ほらあの体型でしょう？」

確かにあの立派なお腹がこの狭い通路を通り抜けられるかどうかの不安はあったろう。だが彼の目的が他にあったのも疑いようのない事実だ。

「それで？」

真由美さんが奥で眠りこけているはずの両親の方をちらと見やる。バツが悪そうな顔をしていた。

「入ったはいいけど出られなくなってしまったんです。タンクの中はとっかかりになるものも何もなくなって。それで小野木さんが戻ってくるまで、そこに居なさいって母が……」

「ええ、でも真由美さんとお母さんまで中に居らしたのは何故ですか？」

「父を引っ張りあげようとしたんです。でも小柄な母やあたしでは

……」
そう言うつと真由美さんはペロリと舌を出した。重量級の父親を引っ張りあげようとして結局、二人とも引っ張り込まれたしまったという訳か……漫画みたいな一家だな。僕は思わず声を上げて笑ってしまった。彼女も釣られてエへへと笑う。タンクの奥からは大小二種類の鯨が聞こえてくる。この一家なら大抵の災害は乗り切ることが出来ただろう。

食料なし、ビールのみで六日間のタンク生活を送る羽目となった石田さん一家は、コンビニの店内から救い出した時同様、旺盛な食欲を示した。ホバーの上で胡座をかいて缶詰を頬張る石田博氏の姿は、杜都市で別れたマリアを彷彿とさせた。

「すると、杜都市には大勢の生存者が？」

「そうです。これから行く中ノ原市にも氷のドームを作る予定です
が、完成には約一ヶ月を要します。どちらに住まわれるかはご家族
で協議してお決めになって下さい」

「そりゃあ先に工事に着工している杜都市だろう。東北のカリスマ
が居るならなにかと安心だし」

「でも、それだとまた小野木さんに迷惑をかけちゃうんじゃない？」

博氏の奥さんが僕の方を見て言った。

「次の東北行きが僕の担当になるのかどうかは分かりません。伊都

……東北のカリスマの判断に委ねてありますから」

「じゃあ、あなたはどこに？」

「は？」

真由美さんの問い掛けに僕はドギマギしてしまった。「あなたと一緒に居たい」と言われた訳でもないのに、だ。特段目立った容姿ではない。スタイルも梓先生のようなモデル並みといった風でもないのだが、初めて見た時から僕を魅了して離さない何か彼女にはあった。「慌てて結婚なんかするんじゃないぞ、遺伝子が求め合う女性が必ずどこかに居るからな」小学生だった僕に父親が言った言葉が蘇っていた。

「ええつと、ですからカリスマ次第なんですが、ドームの建造がある程度進むまでは多分農園、中ノ原市に居ることになると思いまふ」

素敵なお姉さまの前で萎縮するチエリーボーイ同然となった僕が慌ててそう付け加える。何やら発音まで怪しくなってしまうている。真由美さんはふつと唇を緩めて言った。

「じゃあ決まりね。命の恩人にお礼らしいお礼も出来ていないんですもの、何かお手伝いさせてもらわなきゃ。いいでしょ?」

水を向けられた彼女のご両親は、なるほど、といった感じでこくりと頷いた。真つ直ぐに見つめてくるやや吊り目がちな彼女の瞳に、僕は吸い込まれて行きそうになった。

合流

「大丈夫？ 辛くないですか？」

真由美さんが心配げに声をかけてくる。恐らく僕が口を開きつばなしだったせいだろう。しかし僕は4コーナーを抜けて最後の直線に入った馬ではない。ゴキブリ人間どもを寄せ付けないがために23000Hzの音波を出しながら疾走していたのだ。彼女にはそれが苦悶の表情に見えたのだろう。

「ホバーは浮いてますからね。引つ張り始めだけですよ負担を感じるのは」

とは言え大人三人、しかも博氏は重量級である。常人なら巡航域に入るまでに相当の時間と体力を要したことだろう。しかし好意を抱く女性に「僕は、いざとなれば数トンの力を出せるバケモノですから大丈夫」などと誰が伝えられよう。どのみち僕以外がこれを引くことのない限りバレル心配はないのだ。石田さん一家の目には？ 頼り甲斐のある力持ちの青年？ としか映らないはずだった。例えば女性用のハーフコートを着ていようと。

しかし時速60km/hで口を開けての疾走は喉が乾く。30分置きに足を止めて水分補給をする必要があった。ホバーの上で缶ビールを溶かしながらチビチビとやっている博氏のお気楽さが羨ましい。少々、呂律も怪しくなっていた。

「遠いから？ そろ農園とやらは」

後ろを振り返っている訳には行かないし窓の閉まった車でもない以上、返事をしたところで、博氏に届いたかどうかも疑問だ。聞こえなかったふりをして真由美さんにだけ届くよう短く意識を送った。「一時間弱つてとこじゃない？ あれ？ 何であたしそんなこと知っているんだらう」

上手くいった。こうやって彼女の気を いけない、いけない
いい人間に意識操作をしてはならない。それは伊都淵さんの厳命

だった。

ほぼ予定通りに中ノ原インターチェンジを降り、かつてバイパスだった道を農園へと向かう。八歳の時に離れて以来、およそ十五年ぶりとなる農園だった。少し雲が薄れた程度では昔の面影を期待することは出来ない。何せこの国は南極だった座標に位置しているのだから。トコログリアがなければ生きて行くことすらままならないのが現状なのだ。

木々は衝撃波でなぎ倒されていたか凍りついていたが、見覚えのある地形が標準視野の中に入ってきた。車道側から登って行けば母屋のあった場所がシエルターの入り口になっていると、雄さんは衛星電話で告げていた。

「ここです」

真由美さんと石田さんの奥さんが丘陵の頂を見上げる。僕は最後の難関たる緩斜面　とは言え五分の一勾配である　を登ろうとするのだが車道の始点は大きくリターンしていて助走がつけられず、20m程登っては滑り落ちてしまう。僕は仕方なく四つん這いで登ることにした。やれやれ、これではゴキブリ人間と同じではないか。手伝いを申し出てくれない石田博氏は大鼾をかいていらつしやった。

到着を知らせるべく鉄の扉を氷の塊で叩く。何だか原始人になつたような気分だった。跳ね上げ戸がギリギリと開き始め、警戒に目を光らせた雄さんの浅黒い顔がのぞいた。

「丈か！　無事だったんだな。おいみんな、丈が戻ったぞー」

未だかつてこんな嬉しそうな顔をする雄さんを見たことがない。有名なボクサーだった彼は、いつもストイックに心身の摂理を追い求め、カジさんが乗り移ったかのような無表情でトレーニングに励んでいるものだ。なにも宇宙旅行をしてきた訳ではない。東北の青森よりずっと近くの杜都市を往復しただけだ。平時なら何でもなような事を飛び上がらなければかりに喜んでくれる雄さんに、僕は胸

に熱い物を感じていた。

杜都市程ではないが、かなり大規模なシエルターだった。ここにはどれだけの生存者が居るんだろう？母や生徒達は元気にしているだろうか。ゴキブリ人間の気配がないことを確かめて石田さん一家をホバーから降ろす。寝ぼけていたのか酔っ払っていたのか、博氏は僕をタクシーの運転手と勘違いされたようで「幾ら？」と訊ねて胸ポケット辺りを探っている。財布でも探していらしたようだ。

僕は雄さんの案内でシエルター奥の区画へと進んだ。涙で顔をぐしょぐしょにした母、懐かしい誠さんと剛さんの顔、無事だった子供達とスーザンの歓待に僕は涙が出そうになった。

「じゃあ、ここにも？」

「ああ、シエルターの扉を開けるまでの知恵はないようだな。今のところ誰も襲われてはいない。奴等が最初に姿を見せたのはお前が杜都市を発った後だった。道中のお前に連絡を取る方法がなくなっただけで心配していたが無事で何よりだ。アレは一体なんなんだ？」

「伊都淵さんに詰め込まれた知識を借りての推測ですが、中国が人体にゴキブリの遺伝子導入を行なったんだと思います。ただ、あれは失敗作ですね。えらい中途半端なところで融合が終わっていますから」

母達の歓待もそこそこに、僕は雄さんに呼び出されてシエルター入り口右手にある区画に居た。色々と報告せねばならないこともあったし、雄さん達は雄さん達でゴキブリ人間の情報を欲しがっていた。

住人が増えたのと女性も居るということで誠さんが間仕切りを作り、ワンルームだったシエルターを区分けしたのだそうだ。誠さんの手先の器用さは僕がここに住んでいた頃から農園スタッフの中でも抜きん出ていた。そして何を隠そう僕は不器用この上ない。太くて短い指で器用に道具を操る誠さんに憧れたものだった。そんなどうでもいい回想にお構いなしで雄さんは続ける。

「杜都市には、まだ奴等は現れていないそうだ。だから伊都淵さんの所見も聞けていないのが現状だ。丈がそう判断したのなら間違いないだろう」

「だけど、あんなのが居たらドームなんて作れないじゃないか」

それまで黙っていた誠さんが割って入ってきた。確かにその通りだが、手先の器用さではカジさんに勝るとも劣らない誠さんである。伊都淵さんに設計してもらえば音波発生装置ぐらい作れるのではないか？ 僕はそれを提案をする。

「ははあ、デカくなるうが人間と混ざろうが嫌いな音波に変化はない訳か。よし、作ってみよう。雄、次の連絡をする時に伊都淵さんに聞いておいてくれ」

誠さんが腕ぶす。

「バイナリ地熱発電も見直す必要があります。それとドームを作るにはバイオ流体緩衝材も大量に必要となります。こちらでも培養するようにとの伊都淵の指示です。培養槽と胚はホバーに積んであります。ドーム建造の工程表とガスタービン発電機的设计図も預かってきています」

僕は銀色に輝くUSBメモリをポケットから取り出して誠さんに渡した。

「ガス容器はホバーにあります。途中でスーパの配送トラックから失敬してきた食料もそこに。取ってきます」

「手伝おう。おいっ」

奥に控えていた男性四人を伴って、僕は再び氷の世界へ続く階段へと向かった。少しだけ気になったのは剛さんの元気のなさだった。

「出来そうですか？」

音波発生器の設計部が描かれたパソコン画面を眺める誠さんの背中
中に声を掛ける。

「発振器そのものは何とかなりそうだ。デカイスピーカが欲しいな」

「その辺りに転がっている車から拝借してきましょう。他に必要な

ものは？」

「カーオーディオやナビがあれば集めてきてもらうと有難い。半導体は用途が多いからな。反響板を作るのに金属のパネルも欲しい。倒れた看板や車のボンネットを剥がしてきれくれ」

「わかりました」

「簡単にメタンハイグレートの鉱床が見つければいいが、楽観は出ない。プロパンガスの容器も探してみてください」

どちらかといえばのんびり屋だった誠さんも真剣な目になっていた。

「了解です」

大き過ぎてシエルターに運び込めなかったガス容器は屋外に放置してある。培養槽は分解して持ち込んだものの、どの区画も狭くて入りきらない。屈強そうな（あくまでも一般人のレベルとして）男性達が仕切り板を外して手前二つの区画を繋げる作業をしている。僕は雄さんに訊ねた。

「所教授と梓先生は連れてこなかったんですか？」

「このシエルターには設備がないってことでラボに残られたよ。衛星電話はあっちにも置いてきたが、屋外でないと繋がらない。余程の事態でも起きない限り、奴等が居る可能性のある外には出て欲しくない。同じ理由でこちらからの連絡も控えている」

「僕が行って連れてきましょうか？ 櫛とホバーがあればある程度は機器も運べると思います。犬達は借りられますか？」

「そうすべきなのかも知れないが……伊都淵さんに相談してみよう。丈は少し休んでおくといい」

なるほど、最初から飛ばし過ぎて息切れしてもしょうがないということか。休める時には休んでおこう。僕は歓待の仕切り直しのため、広く仕切られた奥の区画へと向かった。ちなみにこれは洒落ではない。

対決

集会所を兼ねた奥の区画は、このシエルター内で一番の広さを持つており、培養槽の設置作業にかかっている以外の人々が勢揃いしていた。新たにシエルターの仲間に加わった石田さん一家もすっかり打ち解けた様子で、僕は人々と談笑する彼等を微笑ましく眺めていた。

「先生、お帰り」

走り寄ってきた西村太と林田沙織が満面の笑顔を向けてくれる。旅の苦労が報われる瞬間である。

「ただいま。こうなっちゃってからゆっくり話している暇もなかったな。教科書は持っているか？ 授業を再会するぞ」

「えー」

二人は僕の冗談に大仰に驚いてくれる。そんな日が戻ってくれることを願ってはいたが「その日を待とう」と子供達に告げられるだけの根拠も自信もなかった。

「ご苦労様。この旅があんたを一人前にしてくれたみたいね。父さんによく似た面構えになっちゃって」

そしてあれだけ気丈だった母は、めっきり涙脆くなっていたようだ。父親に似た？ という言葉を聞かされても、僕は以前ほど不快ではなくなっていた。

「息子さんでしたか、彼は我々の命の恩人です」

母の手を両手で握ってブンブン振り回す石田博氏だった、何日かぶりに完全に風雪から遮断される環境に安心したのか、座ったままうつらうつらする石田さんの奥さん。自己紹介前で名前は分からないが実直そうなお主人と向う意気の強そうな息子のいる五人家族、とシエルターの住人は二十名を超えていた。ドーム建造を急がないと伊都淵さんは人を集めるといつていたが、このままでは生存者を発見しても収容する場所がなくなってしまうのは確実だった。

こうして生存者の顔ぶれを見ていて気づいたことがある。氷漬けの死体やホモローチとの遭遇にキヤーキヤー泣き叫ばないだけの落ち着きというか分別、彼等にはそれが備わっていたようだ。悲鳴は更なる混乱を招き、弱さと敵を呼び寄せるものだ。危機に瀕した時こそ冷静に対応出来ることが災禍を生き延びるのに必要な要素なのではないだろうか。それは大人も子供も同じことが言える。

僕は誠さんにいわれた材料を集めるためシエルターを出た。氷で銀色に舗装された国道に出た辺りからゴキブリ人間の気配が伝わってくる。音波を出せば遠ざかり、口を閉じればまた近づいてくる。まあ、なんとかなるだろう。相手の出方もわからなきや、間近で見たのも一回こつきり。考えてみたところで詮無い話だった。

作業は単純だ。氷漬けになった車から氷をかき落としてドアを引っ剥がし 殆どの車が施錠などされてはおらず老若男女の冷凍マグロが運転席を占有していたが オーディオや電子部品らしき筐体を傷めることないよう取り外して（これが人口筋肉の僕には案外骨である）ホバーに積み込んでゆくだけだ。たまに氷を取り除いたら自販機が積み重なっていたりということもあつたが所有権を主張されなくなった車は腐るほどある。僕は意識してワンボックスワゴンを避けた。冷凍マグロの家族を見たくはなかったのだ。

殆ど減っていない50kg容器的プロパンガスを倒壊した建物の瓦礫の中に見つけた。ホバーの下に束ねて敷く。次はスピーカーだ。まだ人工皮膚が上手く馴染んでいないため、ドアパネルごと持って帰ることにする。鉄板は反響板に使えるだろうし、元来が不器用な僕に小さなスクリーンを回してスピーカを外すといった作業には不向きだからだ。反響板は大きければ大きなほどよいはずだ。僕は看板を探すことにした。どうせ誠さんが折り曲げたり溶接したりして成型するのだろうが、ドアパネルはサイズの割に重かった。なるべく面積の大きな金属パネルを探すとすると、やはり看板に限られてしまう。

農園を離れてかなりの年月が経っていた。タコが自分の足を食べて行くような経済政策しか思いつかない政府のお陰で多くの店舗は倒産へと追いやられ、そしてまた新しい店へととって代わる。比較的那の新陳代謝が目立たない業種がパチンコ・スロットの類だった。ただっ広い駐車場跡に建物が崩れ落ち、造成中の工事現場みたいになっっている場所があった。ここにならあるんじゃないか？ 僕は氷に覆われたオブジェの原型推察にも長けてきていた。

？出ます！ 出します！ チンコ？ 屋号と？パ？の字が消えて、とてつもなく下品になったキャッチコピーが氷の中から姿を現す。僕は苦笑を浮かべてそれを引き剥がしにかかった。

座標が南極になるうと他の星に来た訳ではない。建造物は倒壊していても氷さえ掘り起こしてゆけば生活に必要なものはほぼ見つけられるものだ。僕は学校の隣を流れる川の橋のたもとで暮らしていたらした人々の気持ちが変わるようになっていた。

これだけあれば充分だろう。戦利品で山盛りになったホバーを引いて帰ろうとした時、ゴキブリ人間どもの気配が近づいていたことに気づいた。しかし今回は敢えて音波を発しない。奴等の生態を観察してやるうと思っていた。

身を潜めるところなどない駐車場跡だった。僕の周囲を円形に取り囲んだゴキブリ人間どもはその間隙をじわじわ詰めてくる。だが、ある一定の距離で接近を止めていた。僕は考えた。氷の檻で遭遇した時は缶詰などの食料を持っていたが今は身ひとつ。所謂、着の身着のまま、木の実ナナという現況だった（父さんがよく口にしたジヨークである）。奴等が臭覚で獲物を嗅ぎ当てているとすれば、四肢が人工筋肉と人工皮膚、おまけに骨までもが作り物の僕に食欲を示すのだろうか、そんな可能性も考えていた。

内臓を根こそぎ喰い尽くされていたアイスギャング達同様、背骨が通っている部分は僕のオリジナルだったが、世の中に口臭のひどい人間は居ても、内臓臭を漂わせている人間は多分居ない。そしてよしんば戦闘になったとしても、足でまといになったるう石田さん

一家を連れていた時とは状況が違う。看板の柱に使われていた鉄柱を引きちぎると、僕は一步前に踏み出した。

正面のゴキブリ人間が下がって、背後の奴等が前身する。僕が後退すると奴等はその逆の動作をとった。僕を囲む連中の輪は約15mの直径のまま一向に変化しない。そのまま三分も経つたらうか。焦れて行動を起こしたのは若干二十三歳の堪え性のない若造、つまり僕の方だった。直径15センチ長さが5mほどの鉄パイプを振り回しながらゴキブリ人間の輪に向かって走り出す。奴らは蜘蛛の子を散らすように逃げたかと思うと、僕が足を止めた時点で再び包囲網を張り巡らす。埒があかない、正にそんな状況になっていた。

頭の中で電卓を叩く必要すらなく奴等の数を知った。ひとりいや、一匹か？それが占有する幅が約70cmとして隙間なく並んで47.1mの輪を作っているのだから58.9匹が居る計算となる。小数点は有り得ないので繰り上げておこう、59匹だ。如意棒を振り回す孫悟空よりしく鉄パイプでゴキブリ人間をなぎ倒してゆけば活路は開ける。一秒間に体長の50倍を移動するのはゴキブリのオリジナルの方で、不完全に融合なったゴキブリ人間ではない。僕がそれに踏み切れずにいたのはマリアの例があつたからだ。最初は殺す、殺すと言っていたマリアも誤解が解ければ彼女も気のいい母熊だった。上手くゴキブリ人間を説得することが出来、ドーム建造の労働力になってくれればこんな嬉しい話はない。世界はひとつ、人類はみな兄弟　のほずだった。

突然ゴキブリ人間が跳躍して襲いかかってきた。降りかかる火の粉は払わねばならぬ江戸の空。って誰の思考なんだ、これは……

超視覚を開放すれば、人類よりいくらか俊敏なゴキブリ人間の動作もスローモーションとしか映らない。ただ戦闘そのものが初めてだった僕に欠けていたものがある。手加減というヤツだ。比較的装甲の硬い背中側に当たっても、数トンの力かけることの5mのトルクで振り回される鉄パイプは、いとも簡単にゴキブリ人間の体をまっぴたつに切り裂いてゆく。太い鉄パイプが鋭利な刃物のように感

じられた。どす黒い体液を垂れ流して、あっという間に死骸の山が出来上がって行く。ひよつとすると僕には殺戮者の素養があったのかも知れない。陶然としかけた僕の脳裏に伊都淵さんの警告が響いた。

無益な殺生はするな

僕は鉄パイプを振り回すのを止め、オプションを選択した。23000Hzの音波を発したのだ。奴等に退却を促すつもりだった。

サイトカイン・ストーム

退却を始めたゴキブリ人間たちの頭部が熟れたザクロのように破裂してゆく。どの個体も同じように体液に似たどす黒く変色した脳髓を撒き散らし、その飛沫は僕の足元にも飛んできた。僕は焦った。以前は逃げ出ただけだったじゃないか。距離が接近していたからなのか？ いや、あの時とそう変わらないはずだ。イトペディアにアクセスしても回答は得られない。あの時点で伊都淵さんが未接触であったゴキブリ人間の情報などなくて当然だ。

僕は自分がとんでもないことをしたことに気づいた。どう転んでも敵わない伊都淵さんより早くゴキブリ人間対策を講じて、更に彼等を懐柔することが出来れば、みんなの前でいい格好が出来るのではないか、真由美さんに頼もしい男だと思ってもらえるのではないか、そんな功名心に駆られていただけだった。そう、氷の上に転がる数十体の亡骸は彼等だ。異形のハイブリッドに姿を変えていたとはいえ元は紛れもなく人間だったのだ。

殺らなきゃ殺られていたんだ。仕方ないじゃないか
追い払うことだつて出来たのに、僕はそうしなかった。それに彼等を切り裂いていた時、僕は愉悦に浸つてさえいた。あの気の弱かつた僕が……

後悔は絶え間なく押し寄せてくる。何がリーダーだ、伊都淵さんに持ち上げられていい気になつていただけじゃないか。ガランと音を立てて鉄パイプが転げ落ちる。膝の力が抜け、涙が溢れ出した。9・02直前に存在が確認されたタキオン粒子があれば、それに乗つて時間を逆行したくなつた。

「タケ坊の奴、遅くないか？」

作業の手を止めることなく誠が雄一郎に訊ねた。

「そうだな、出掛けてもう4時間になる。あの体だ、心配したこと

はないと思うが見てこよう。衛星電話を持って行くぞ」

ガスタービン発電機の配管をしていた雄一郎が立ち上がった腰を伸ばす。

梓先生が言った通りなら、相手が何であろうと丈の体に指一本触れることは出来ないだろう。そうは思うのだが、茫漠とした不安が雄一郎にはあった。じつと右手を見つめる。中山達との闘いで意思があるかのように動いたそれと同じものを丈は持っている。まだまだ精神的に未成熟な丈が自身の発揮する力に酔いしれて暴走してしまふ危険がないとは言えない。「導いてやってくれ」伊都淵からもそう言われていた。だが、それが自分に務まるのだろうかといった不安もあった。「動いてこそ見つかる答えもあるってもんだ」今は亡き農園オーナーの 丈の父親の言葉を思い出す。とにかく丈を見つめよう。ローラーブレードに足を通し、クロスボウを手に取る。雄一郎は一気に緩斜面を駆け下りて行った。

かつて国道だった場所に出てすぐ雄一郎は強烈な臭気に襲われた。何だ、この臭いは……クロスボウを左手に構える。見渡す視界の中心に出来た斑点の様に横たわる茶褐色の個体は頭部らしき部分が破裂して黒っぽいジェル状の物を流出させていた。死んでいるのか？

雄一郎はおそろおそろ近づいてみる。間近で見たことがなかったため、それがゴキブリ人間の死骸だと認識するまでに少し時間がかかった。流れ出ていたのは脳漿のようだった。これほどの数が居たのか……いや、もしかするとこれでも全部ではないのかも知れない。丈はどこにいる。

俄に丈の安否が気になった雄一郎は異形の屍の間を縫って走り出す。こいつ等は何故死んでいるのだろう。丈がやったのだろうか？ そんな事を考えながら数キロ程走った時、見覚えのある赤いコートが目についた。膝について俯いているように見える。

「丈っ！ 丈なのか？」

雄一郎の呼び掛けにも返事はない。積み重なった異形の残骸を回り込んで赤いコートに駆け寄った。

「丈……怪我はないか？　これはお前がやったのか？」
力なく顔を上げる丈の目はゴーグルのレンズが曇って見えない。
泣いているようだった。

「雄……さん、僕は人殺しです」

そう言ったときり丈はまた俯いてしゃくり上げる。雄一郎は衛星電話を取り出した。

雄一郎か、どうした？

「伊都淵さんをお願いします」

電話に出たカジが伊都淵を呼んでいる様子があった。

「何かあったようだな」

脳波を読むことの出来ない電話越しでも伊都淵の勘の鋭さは人並み外れて優れている。明らかに何かを察知している口調だった。雄一郎は推察を混じえて現状と丈の様子を伝えた。

頭部が？　実はこつちもマリアが　君が襲われかけた熊のことだ。丈君から話は訊いているだろう。彼女が一体捕獲してきてくれたんだ。それで尋問しようとしたらいきなりバン！　頭が破裂して死んでしまったよ。

「それも丈がやったんでしょうか？　こいつ、随分ショックを受けているみたいなんです」

おいおい、丈君はバケモノじゃないんだぞ。800kmも離れた場所から思念で命を奪うなんてことは出来んよ。これはきつとサイトカイン・ストームだろうな。

「サイトカイン……何ですか？　それは」

おそらく彼等にはアデノウイルスをベクターに使った遺伝子導入がなされたんだと思う。そんな時代遅れの方法でゲノム（DNA塩基）量も染色体の数も違う異種間が上手く融合するはずはないんだ。免疫系が異形の細胞をウイルスと判断して攻撃を加えたんじゃないかな。放っておいてもホモローチの第一世代は勝手に死滅するだろう。

「ホモローチ？　それが奴等の名前なんですか？」

ホモサピエンスとコックローチのトランスジェニツクだからホモローチ、ゴキブリ人間じゃあ語呂が悪いだろう。

命名を得意気に語る伊都淵は雄一郎に褒めて欲しいようでもあったが、今はそれに取り合っていない場合ではない。

「専門的なことはよくわかりませんが、これは丈がやったのではない訳ですね？」

奴等の死体は頭部が破裂したもものばかりなのかい？

「いえ、体が半分になっているものもあります」

雄一郎は丈を取り囲むようにして積み重なった死骸を見て言った。電話の向こう、黙り込んだ伊都淵は何か考えているようだった。

何体かは丈君がやったのかも知れないな。彼と代わってくれるか。

「伊都淵さんだ」

そこに居るはずの雄さんの声が遠くで聞こえるような気がしてならない。手渡された衛星電話に僕は耳を近づけた。

何体殺したんだ？

一時も休むことなく襲いかかる悔恨に苛まれていた僕に、ダイレクトに訊いてくる伊都淵さんだった。僕は電話を取り落としそうになった。

「……多分、六十人ほどだと思います」

雄一郎君にも話したが頭が破裂した連中は君のせいじゃない。

「本当ですか？」

気休めではないのだろうか？　だが、顔を上げて見た一面にゴキブリ人間の死骸が散乱している。僕の知らない何かが彼等に作用したのかも知れないと、思えるようになっていた。

ああ、詳しいことは雄一郎君の意識を読んでくれ。確かに彼等も元は人間だったが意思を交わすことは不可能だったろう？　私がそれを試す前に死んでしまったが、マリアと一緒に居た依子の話では意識らしい意識は持っていなかったそうだ。今回のことは襲っ

てきた連中から身を守るためだったと思うしかない。そして早く君自身
の能力を掌握しろ。

雄さんの意識からサイトカイン・ストームの情報を仕入れる。それ
でも僕は十人程殺してしまっていた。許されることではない。「
はあ」と弱々しい声が洩れる。自分の声ではないような気がした。

君の出発前にも言ったが、時間がどれだけ残されているかは
わからないんだ。そうやってメソメソしている時間があるならドー
ムの建造を進めろ。君のせいで生き残っている人々の命が危険にさ
らされるとしたら、それこそ後悔してもし切れるもんじゃないぞ。
傍に居れば背中のひとつも張ってやりたいところだが、そうもいか
ん。自分で立ち直れ。過ぎた事を気にしても始まらないぞ。君は失
敗してはいけないと考えているんじゃないか？ だとしたら大間
違いだ。人類の歴史そのものが失敗の連続に過ぎないんだから。戦
争然り、科学然り、政治や経済だってそうだろう。失敗は糧にする
んだ。

伊都淵さんの言葉は厳しく僕に降り注ぐ。そうだ、僕はシエルタ
ーの人々を守らねばならないんだ。母を、子供達を

君はまだ成長途上だ。命を奪った行為を容認する訳ではない
が、彼等は君が手を下さなくても死んでゆく運命だった。小さな子
供が蝶の羽根を筆ったりもするだろう？ そしてそれがいけないこ
とだと学んで行く、成長つてはそうゆうものだよ。この俺だってガ
キの頃はカエルの肛門に爆竹を突っ込んでみたりへびを小間結びに
したりもした。そのくらい誰だつて通る道じゃないか」

いや、幾ら何でもそこまでは……とにかく、伊都淵さんの言わん
とすることはわかった。彼の子供時代が相当な腕白坊主だったこと
も。そして闘うということは相手を打ちのめすばかりではないとい
うことを伊都淵さんは伝えようとしてくれていた。

「ご迷惑をおかけしました。もう大丈夫です。ドームの建造にかか
ります」

「その意気だ」

僕は電話を雄さんに返して立ち上がった。雄さんもホツとした顔になっていた。

「丈は優し過ぎる。俺もシエルターを奪い返す時、6人殺している」
ならず者どもに奪われたシエルターの奪回作戦については誠さん
や伊藤さんから何度も聞かされていた。その6人については雄さん
が直接手を下したのではないということも。

「でも、やむを得ないことだったんでしょ？」

「あのまま生きながらえてくれればとも思ったが、怪我の手当もせ
ず放置したのは間違いなく俺の判断だ。命を奪う行為をやむを得な
いとは、お前の親父さんだったら絶対に言わなかつたらうな。それ
を俺はやったんだ」

僕ならどうしていただける？ 真つ先に頭に浮かんだ疑問はそれ
だった。罪のない命を守るため、時として力に訴えなければいけな
い場合だつてある。雄さんの選択は正にそうだったはずだ。だが僕
にそれが出来たかと問われれば自信を持って答えることは出来ない。
返答の代わりに僕は言った。

「帰りましょう。戦利品を誠さんに見てもらわないと」

「そうだな。戻ろう」

僕達はホバーがゴキブリ人間の死骸に接触しないよう、注意して
足を進めた。

再生への狼煙

それからの僕は一心不乱に氷のドームの建造に励んだ。所先生ご夫妻にいただいた体は労せずして氷のブロックを積み上げることが出来たし、伊藤さんが重機のリース会社跡を見つけてきたので発電機と数基の重機も運び上げた。雄さんと二人でガソリンスタンドの地下タンクを掘り起こすと燃料の心配もなくなった。僕と雄さんの膂力については誰に語った訳ではないが、このコミュニケーションにおいて周知のものとなっていたようだ。数トン、或いはそれ以上の重機を引つ張り上げてくるのだから当たり前といえば当たり前の話なのだが。

シエルターには文化的な生活が取り戻されていた。寝る間も惜しんで作業にあたる僕を母は心配そうに見ていたが、じつとしているとホモローチの体を切り裂いた時の感触が蘇って心が掻き乱されそうになる。僕は誰よりも早く起きてドームの建造を進めた。

「少しは眠れよ」

跳ね上げ戸から顔を覗かせて雄さんが言った。

「P300Aのせいでしょうか。三時間も眠れば心身ともにスッキリしちゃうんですよ」

三時間の睡眠で充分であることは本当だったが、レム睡眠期に見る夢は悪鬼の如き形相の僕がホモローチの殺戮を繰り返すシーンばかりだった。それが怖くて僕はこの二週間殆ど眠っていなかった。

「どれ、手伝おう」

雄さんは僕が積み上げた氷のブロックの表面を均し始めた。そこに食塩水をかけて上に重ねれば、伊都淵さんの言った通り漆喰もコンクリートも必要とせず、強固で断熱性に富んだ壁が出来上がってゆく。

「早いな、まだ五時前だぞ」

寝惚け眼の誠さんも外に出てきた。うるさくしたつもりはないが

娯楽らしい娯楽のないこの世界では早寝早起きが習慣となつてしまふ。「さあ仕事だ」の号令などなくともドーム建造の現場にはスタツフが勢揃いしていた。あの9・02は夏の出来事であつた。軽装だつた人々は毛布や布切れを纏つて寒さをしのいでいたが、今は僕がある倉庫の残骸から見つけ出してきた冬の建築現場の作業員が着るようなハーフコートが全員に行き渡っている。オリーブ色だつたりネイビーブルーだつたりエンジ色だつたりしたが、住人のユニフォームの様になっていた。僕が大雑把に氷を割ると誠さん達がチーンソーや丸鋸を使って長方形に仕上げに行く。半月程で壁となる部分は9割方完成していた。

「朝食ができましたよー」

真由美さんの声が聞こえた。跳ね上げ戸から上半身だけを出し、口に手を添えて叫んだ後、目が合った僕に微笑みかけてくれた。僕の中に堆積していた重苦しさが取り払われてゆくようだつた。

順応性という言葉は女性のためにあるものだと思つていたが、この状況を受け入れて尚、気が狂れることなく未来を築き上げて行くこととする人々を見ると、それは人類の粘り強さを表現したものではないかとも思える。新しい発見も約束された将来もないこの状況で、人々は他愛のない冗談を口にし合う。時に笑い、時に手を叩いて食事を楽しんでいた。

「どうしたの？ 元気ないわね」

僕に声を掛けてきたのはエンジのハーフコートを着たスーザンだつた。すっかりシエルターの仲間に溶け込んだ彼女が雄さんに並々ならぬ関心を抱いていることを僕は気づいていた。しかしスーザンからしきりに送られる秋波さえ気づかない雄さんは朴念仁を絵に描いたような人物だつた。『他人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んでしまえ』と言われようが、スーザンと雄さんが似合いのカツプルになるとは思えなかつた。

「そんなことないですよ。食欲もありますし」

「ならいいんだけどさ。ねえ、雄一郎さんって独身よね？　彼女は居るのかしら？」

ほら来た。ここで迂闊に話に乗っかるとエンジェルの役目を仰せつかることとなる。僕は空とぼけることで大任を回避する。

「さあ？　8歳の時にここを出て以来、逢ってませんでしたから。直接本人に訊ねてみたらどうです？」

「そっか、じゃあいい」

スーザンは橋頭堡を誠さんに託したようだ。僕に背中を向け、誠さんの腕に自分の手を置いて話し始めていた。誠さんがあらぬ誤解をしませんように。

「　　ないの？」

「……え？」

僕は眠っていたようだ。食器の乗ったトレイを指差して何か言っていたのは石田さんの奥さんだった。

「もう食べないの？　体調でもすぐれない？」

「いえ、大丈夫です。すみません、食器は下げて洗っておきますから休んでいて下さい」

「そんなことを命の恩人にさせられると思って？」

未だに二言目には　命の恩人？と石田さん一家は僕を呼ぶ。照れくさくて仕方ない。

「あの状況下で、生存者を見つけたら誰だって同じことをしたでしょう。通りかかったのがたまたま僕だけでした。だから、それはもう止めて下さい」

「そうかも知れないわね……でも本当は別の人が私を助けに来てくれるはずだったの」

石田さんの奥さんの視線が彼方に向けられた。

「地球最後の日には何があるうと助けに行く、そう言った人がいたわ。最後まで嘘つきだったのよね、あの人は」

石田さんの奥さんの瞳はどこか寂しげでもあった。　あの人？と

いづのはどうやらあの楽天家のご主人の話ではないようだ。

「あの衝撃波を生き延びたのは全人類の3パーセントに満たないと東北のカリスマは言っていました。それにトコログリアの接種を受けていなければ、この氷の世界であなたを探すこともあなたの許へ辿り着くことも不可能だったことでしょう。嘘をついたのではないと思います」

「どこの誰だかわからない あの人？を僕は何故だか弁護する。

「でも、奇遇よね。その人も小野木さん、あなたと同じ名前だったの。彼があなたを代わりに寄越してくれたんだと思ってあげようかしら。本当に地球最後の日が来るなんて思ってもみなかった。いつも大袈裟なことばかり言う人だったわ」

「どこかで聞いたような話だな、いつの時代もそんな男はいるものだと思うっていた僕の頭で何かの接点が閉じた。げっ、父さんだ。」
「俺は奈緒子を愛し過ぎてしまったんだ。だから彼女を失うのが怖くて嘘を塗り重ねていった。結果、奈緒子をひどく傷つけてしまったよ。今もあの三連星を見ると彼女が幸せで居てくれるようにと祈っている」
「こんな話を6歳の息子にするか？ だが父さんはした。僕の目の前で思い出を語る女性は、妻子が居ながらそれを隠して父が9年間も交際を続け、とんでもない別れ方をしたという女性に違いない。僕が石田真由美に訳もなく惹かれてしまった理由にも答えが見つかったように思えた。 悲しい答えが

『将を射んとすれば先ず馬を射よ』この世間話にそんな目論見がなかったとは言い切れない。僕のそんな姑息な思惑は『藪をつついて蛇を出す』結果となってしまった。自分を酷い目に合わせた男の息子に可愛い娘を近付けさすはずはない。しかし黙っている訳にも行かない。話題に乏しいシエルターの中では、いつかバれてしまうことだったのだ。せめて母に知られる前に と、僕は正直に語ることにした。

「ええと……実は僕の父は15年前に東北で亡くなっているんです」

「まあお気の毒に」

「石田さんの奥さんのお名前は、ひよつとしてナオコさんですか？」

「そうよ、奈良県の奈にへその緒の緒。真由美に訊いたの？」

間違いない、僕は頭を抱えた。

「いえ、父です」

怪訝そうに首を傾げた石田さんの奥さんの目が見開かれる。どうやらお気づきになられちゃったようだ。

「……あなた、ひよつとして淳一の」

「はい、息子です」

廃棄されたガソリントラックの中で眠れるほど腹の座った石田さんの奥さんが喚き出すとは思えなかったが、そう答えた瞬間、僕は目を閉じ首をすくめていた。怒号もビンタも飛んではこない。僕はゆるゆると目を開ける。石田さんの奥さんが僕を見る目は懐かしいものを見るようでもあり感慨深げそうでもあり、とにかくそこに怒りの色がなかったのが意外だった。

「言われてみれば、あの人の面影が 何故、今まで気づかなかつたのかしら」

「あの……決して隠していた訳ではなく、僕もついさっき気づいただけで」

「私が怒りだすとも思った？ あなたもお父さんに似て女心がわかっていないのね」

そう言う石田さんの奥さんは真由美嬢によく似た目を細めた。

僕は理解が及ばず目をしばたかせるばかりだった。

「女は心の中に憎悪と愛情を共存させることが出来るのよ」

その言葉を何度も頭の中で反芻してみた。敢えて説明の必要はないだろう。これを聞いたなら父さんは狂喜したに違いない。

「そうか、やっぱりね。真由美があなたの事を好きになっちゃうはずだわ。親子ねえ……真由美のことをお願いします。あの子は口に出してこそ言わないけど、あなたのことが好きみたい」

そして僕も狂喜した。

「ところであなた独身よね？」

「いえ、結婚して……ました」

「ました？ 離婚でもなさったの？ その若さで？」

「あの9・02で妻と息子は死にました。役場がなくなっちゃったので戸籍はそのままですが、現実には婚姻関係に法的な拘束力はなく、それにこんな状況ですから」

必死に説明する僕を見て石田さんの奥さんはぷつと吹き出された。「ごめんなさい、痛ましいことなのに笑ったりして。あなたがあまりに杓子定規な物言いをするものだから。事実上、障害はないってことね？ 良かった」

簡単に納得する石田さんの奥さんだった。

「すみません、出来ればこれは母には内密に」

「わかってます。あなたのお母さんとは再婚なのよね？ まったくあのゼウスめ、どれだけ女を泣かせたら気が済むんだろう」

この時石田さんの奥さんが神の名前を口にされたのは、決して威厳を讃えようとしたのではなく単に父さんの女癖の悪さを揶揄したものだっただろう。だが僕は別のことを考えていた。父さんは人のいい所を見い出すことが上手だったとカジさんは言っていた。長所ばかり目についてしまえば、どんどん人を好きになっってしまうのも無理もないのではなからうか、と。至って都合のいい解釈ではあったが、息子の僕ぐらいは理解してやらないと。勿論、そんなことは石田さんの奥さんにも真由美嬢にも口が避けても言えない。

「仕事に戻ります」

「頑張つてね」

僕は複雑な心境だった。僕の手足、そして課せられた使命。実のところ障害は山ほどあったのだ。

完成 氷のドーム

ドームは完成した。115m x 82mのそれは建築の素人集団が作り上げたものとしては立派過ぎる出来栄であった。正直、ここまでのものが出来上がるとは僕自身思ってもみなかった。衝撃波に備えて垂直部分は一切なくし、柱の一本一本、ルーフィングに用いた氷のブロックの隅々にまでバイオ流体緩衝材が注入されている。薄灯りの中、それは赤く誇らしげに煌めいていた。ゴキブリは赤い光が見えない。ホモローチ対策にも効果を発揮してくれるだろう。

屋根下部分にはコンクリート工場の残骸から拝借してきたアラミドクロスで包み込んで作ったキャットウォークが張り巡らせてある。補強と点検用通路を兼ねたそれが緊急避難にも役立つてくれればいいと思っていた。二重にした外壁の間には人口光合成でハツカヤミント等のハーブ類を栽培することにした。これもゴキブリが嫌がる臭いだそうだ。

住民の生活空間をドーム内に移し、地下シエルターを所教授夫妻のラボとして解放することが決まっていた。雄さんと僕、六頭の犬達が迎えに行く予定だった。ルーフィング（屋根部分の工事）にかかる直前、間仕切りを屋根の高さまで伸ばしてストリング（骨格材）にするセミモノック構造への変更を提案したせいで作業工程が増えてしまっていた。杜都市のドームより良いものを作ろうなどといった伊都淵さんへの対抗意識は既がない。ただただ住民の安全を考えてのことだった。万全を期す？僕の頭の中はそれで埋め尽くされていた。寝るか食べるか作業をしている、そんな毎日が続いていた。だから残念ながら僕と真由美さんの仲は進展していなかった。『希望を失ってはいけない。なくしたものなら我々で生み出して行くんだ。それが明日への力になる。未来を手繰りよせるのは個々の努力だ』伊都淵さんの言葉は真理だった。僕達はやり遂げたのだ。この全てが氷に覆われてしまった世界で。

作業に当たった人々、食事や怪我の治療など裏方として支えてくれた人々の全員が氷のドームを見上げていた。これが出来るのなら不可能なんてない。くたくたに疲れていたはずのどの顔にも力が漲っているように感じられた。

「さあ、引越しだー」

誠さんの号令で全員がそれぞれの役割へと戻って行く。人間重機の僕にも多くの仕事が割り当てられていた。

LPGボンベを両脇に抱えて歩く僕を呼び止めたのは雄さんだつた。

「所教授ご夫妻を迎え入れたら次の段階に移るぞ。まずは周辺の生存者探しだ。このドームなら200人は収容可能だ。その後、俺は東を廻って杜都市を目指す。丈は西へ向かうんだ。生存者のコミュニケーションを見つけたらドームの建造を指導しろ。少数の場合は、どこかに合流させる。人が地下で暮らしているようでは日本の再建は有り得ない。伊都淵さんはそう言っておられた」

「わかりました」

「誠、剛、伊藤君に留守を任せる。俺は榊君と組む。丈は井上君と智君を連れて行くといい」

「井上さんは榊さんと一緒の方が気心も知れていて動きやすいのではないでしょうか。僕は智君と二人で大丈夫です」

僕に雄さん程の統率力はないが発見した生存者にパーティーに加わってもらえばいい。ちょうどホモローチの餌食となったアイスギヤングを労働力として役立てようとしたように。何となれば動物だつて構わない。伊都淵さんから僕の特異な能力については聞かされていたのだろう。その提案を雄さんは拒まなかった。ただ、この計画は予め伊都淵さんから知らされていたものだ。わざわざ雄さんがそれを持ち出したのは他に話したいことがあるのではないかと考えるのが自然だ。

「これを置いてきます」

ボンベを設置予定だった場所に据えて戻ると、雄さんは緩斜面の

東側　かつてカジさんが住んでいたログハウスのあった場所へと僕を誘った。

「話しておきたいことがある」

案の定、重苦しい表情で雄さんは語り始めた。

「これだ」

雄さんは手袋を脱いで淡いピンク色の右腕を僕に差し出してみせた。

「あの時、この右腕は俺の意識下を抜け出して反応していた。俺は撃つべきかどうか迷っていたんだ」

「でも、敵だと認識したからこそその反応だった訳ですよ？　誠さんや伊藤さんを射った訳でもないじゃないですか。だったら心配したことはないですよ、所教授は何と言われたんですか？」

「脳以外へのP300A投与は俺だけだから検証例も皆無。注意するしかない、そう言われた」

「だったら僕の手足だって」

そう言いかけた僕はホモローチと闘った時のことを思い出した。

口の中に悔恨が苦味となって広がる。僕の四肢は意識下で彼等の体を切り裂いていたのだ。雄さんが語る状況とは違っている。

「覚えていて欲しい。俺の腕が誤ったターゲットに狙いを定めた時、それを止めることが出来るのは文、お前だけだ」

僕は雄さんの言葉の意味を考え、そして狼狽した。

「雄さんの行いが間違っていたことなんか僕の知る限り一度だつてありません。そんな事態になったとすれば、それは正しい判断なんです。恐らく僕なんかでは理解の出来ない」

「俺が誠や剛にクロスボウを向けてもそう言い切れるか？」

強い口調になった雄さんに僕は言葉を失う。そんな事態が起こったら　僕はやはりどうしたらいいかわからないだろう。この世界では一瞬の迷いが誰かの命を危険にさらすことになるのだ。

「まあいい、そんな状況になれば俺自身でこの腕を切り落とす。だが、もしそれが間に合わなかった場合、お前に頼んでおきたかった

んだ。明日は井之口市へ行くぞ。充分に休んでおけよ」

「……はい」

僕はそう答えるのが精一杯だった。

「これ……あなた達が作ったの？」

梓先生は氷のドームを見上げて大きく目を見張られていた。

「ええ、でも設計も工法も伊都淵さんのアイデアです。僕達はその通りに作業を進めただけです」

「それでも凄いな、これは。いや、君を見直したよ」

所教授もそのまま後ろに倒れてしまふのではないかと思うほど体をのけ反らせて赤く煌めくドームを見上げる。雄さんの言葉が気になつていた僕でなければ調子に乗ってセミモノコック構造への変更を自慢気に垂れ流していたことだろう。

「地下シエルターへご案内します」

雄さんに促され、教授ご夫妻は階段を下りてゆく。僕は荷物を解きにかかった。

「手伝うわ」

振り返るまでもない。僕の胸を高鳴らすのは石田真由美の涼やかな声しかないからだ。それはニットキャップを深く被り、顔をマフラーで覆つていても聞き違えることはない。僕の方に歩み寄ってくる彼女は氷点下の世界で腕まくりをしようとしていた。

「大丈夫です、それにこれは重いから華奢な真由美さんには持てませんよ」

勝手に赤らんでしまふ頬をみられなくなかつた僕は俯き加減で返す。

「あら、あたし案外力持ちなのよ」

そうは言つても一番軽い機器で数十kgはあるのだ。とても女性の細腕で持ち上げられるとは思えなかつた。彼女が怪我をすることは勿論、落として衝撃を与えた機械が壊れてしまふ不安もある。僕が止める前にLD100という骨密度測定器に手をかけた彼女だつ

た。せえの、の掛け声で踏ん張ろうと力を込めた足が氷で滑る。僕は仰向けざまに倒れかけた彼女に駆け寄って抱きとめた。

「怪我をしますから」

僕と真由美さんの顔は20cm程まで近づいていた。彼女は顔に巻いたマフラーを掴んでずり下げる。その唇はきつく結ばれていた。「今度出かけたらあなたは当分帰ってこれないんでしょう?」

「ええ。どれだけの生存者が居て、そのうちの何パーセントがトコログリアの接種を受けているかわからない。搜索は一刻を争う。伊都淵さん 東北のカリスマからそう言われてます」

「邪魔にならないようにするから、あたしも連れていって」

思いつめた表情で語る彼女だった。機材運びを手伝おうとしてくれたのは、自分が重荷にならないことを証明したかったのだろう。

三つ歳上の真由美さんを健気というのも変かも知れないが、僕の胸に染み入ってきたのは正にそんな感覚だった。生存者を見つけ出して連れ帰るだけの旅であれば、一も二もなく受け入れていたはずだ。彼女の申し出はそれほど心躍らせるものだった。だが……

「無茶を言わないで下さい。どんな危険が待っているかわからない旅なんです」

「そんなに危険なら、あなたが帰ってこれないことだってあるんじゃない?」

真由美さんの唇が小さく震え出した。この時の僕の呻吟が理解できるだろうか。恋心を抱いた相手から熱烈な告白を受け、それでも期待に応えることは出来ない。使命があり、四肢は作り物。そんな僕は彼女への想いをプラトニックのまま終わらせるつもりでいた。

「ええ、ですから尚更真由美さんを連れてゆく訳には行かないんです。伊都淵さんは言いました。人類の殆どが死んでしまった今、未来を託せるのは子供達なんだ、と。我々男に子供を産むことは出来ません。だから……」

わかってもらえらるだろうか、愛する女性に他の男の子供を産んでくれという辛さが。

「さつきから伊都淵さん伊都淵さんって、あなたの考えはないの？」
あります、僕は真由美さんが好きです。使命さえなければここに
残ってあなたと……僕がそれを口に出来ないでいると彼女は身を翻
した。その瞳に浮かんでいた涙の粒が花弁に滴る朝露のようにキラ
リと光って落ちた。

P300Aの量を増やしてもらおう。今の僕に必要なのは、恋す
る女性の思いを受け入れられられずめそめそする感傷でもなければホモ
ロ―チを殺してくよくよ悩む弱さでもない。雄さんのように使命第
一に徹することの出来る強さだった。

タイタニック

引越しが終わって全員でテーブルを囲んだ夕食の間も、真由美さんはずっと硬い表情のまま僕を見ようとはしなかった。 positioning と言ってしまうえばそれまでだが、彼女と僕の席は遠く、そして今はそれ以上の距離を感じていた。

P300Aの追加投与は拒絶された。あの伊都淵さんだつてすぐに成長した訳ではないといった理由で。しかし当時と今とでは状況が違う。僕の弱さや迷いが救える命も救えなくしてしまうんです。そう懇願してみたが「君の人格を変えてしまうようなことは出来ない」と所教授の首が縦に振られることはなかった。梓先生も黙って首を振るだけだった。僕は陰鬱な気持ちでドームを出ていった。結果をもたらさない能力に何の意味があるだろう。知識が増えその使い方覚えても、感情を統率する人間性が劣っているのは力も張子の虎に成り果てる。こんな矮小な男を人類の希望として選んだことは伊都淵さんらしからぬ判断ミスだったのではないかと僕は考えていた。少なくとも僕が自分に投資をしていたなら、その額を五分の一にまで減らしていたことだろう。女々しい人間重機の繰言は、誠さんが見つけてきた本物の重機の中で涙と共に流れ出していた。僕を取り囲んでいた空気が甘く芳しく感じられて顔を上げると。重機の運転席から見下ろす場所に真由美さんが立っていた。

「今、いい？」

僕は必死に涙を拭いたが、撥水加工の施されたウールが水分を吸い取るはずもない。

「ええ……」

いくらトコログリア接種済みとは言え、氷点下の屋外に立っていて辛くないはずはない。しばれかけたドアを開け真由美さんに手を伸ばす。その手を掴んだ彼女はよいしょっと言ってキャタピラに乗り、そして狭いキャノピー（運転席）に入ってきた。僕はオペレー

ター用シートを譲る。

「さつきはごめんなさい。つい感情的になっちゃって」

「……いえ」

真由美さんの話がどう続いてゆくのかはわからない。彼女の頭の中を探りたくて仕方ない僕がその誘惑に打ち勝つにはかなりの努力が必要だった。

「待つててあげる」

僕が何か話し出すのを待つてくれるのか？ 脳波を読まなければ、そんなトンチンカンな誤解さえ二十三歳の若者はしてしまうものだ。僕は謝罪した。

「申し訳ありません」

分厚い手袋をはめた手でニットキャップを被った頭を搔く。隔靴搔痒ではないが、していることそのものが無意味ではある。

「何故、あやまるの？ 帰ってこないつもり？」

え？ どうやら僕は感違いしていたようだ。真由美さんは僕が戻るのが待つててあげると言いたかったのだ。僕は壊れた扇風機の如く首を振った。

「いえ、帰ってきます。ここには母もいますし……でも、それがいつになるのか」

内気な僕は「真由美さんが居るから」とは言えなかった。恋心というものは妻子が居て同僚の女性を食事に誘うような不真面目な男さえ純真な少年に変えてしまうものなのだろう。昼間したように真由美さんが顔を覆うマフラーを下げた言った。少しだけ不安気な表情にも見える。

「何年も帰ってこられないなんて言わないわよね？」

僕は予想される生存者数と、ドーム建造に要する期間を素早く計算した。伊都淵さんの計算通りなら一千二百万人。つまり東京都の人口が生き残っているはずなのだが、今までに救出なった人々の割合を考えると、かなり下方修正せねばならないと考えていた。バイオ流体緩衝材の培養から教え始め、このこと同じ規模のドームを1

200〜1300程作り上げる。基礎工事が始まった時点で次に移るとして

「一年から一年半ぐらいでしうか」

真由美さんがにっこりと笑った。

「待っててあげる」

ホモローチ惨殺の記憶が消えた訳ではない。雄さんの発言も気になつてた。僕にこんな重い使命を課した伊都淵さんを恨めしくも思っていた。だが

白夜だったので「周囲がパツと明るくなつたように感じた」とは言えないが、感覚的にはそれに勝るとも劣らないものがあつた。僕の憂鬱は自分自身を騙し切れないところに根ざしていたのだ。手袋を脱ぎ捨てて淡いピンク色の肌を露出させる。

「僕の手と足は作り物なんです」

「わかつてる、あなたのお母さんに聞いたわ。だからこそあたし達を助けることが出来たんでしうか？」

「気持ち悪いとか思いませんか？」

「全然思わない」

この期に及んで何を迷うことがある。二人の吐息で曇るユニボのキャノピーの中、僕は真由美さんをふんわりと、それこそ壊れ物を扱うかのように抱きしめた。彼女の唇は温かかった。恐らく悲嘆にくれていた僕が体温調整を忘れていたせいだろう。キーを捻るとユニボのエンジンが始動する。その音で誰かがドームから出てくるかも知れないと思つたが、僕達の激情を止められるものは最早何もなかつた。

狭いキャノピーの中で、僕と真由美さんは結ばれた。何度目かの愛を交わし終えた時、ガラスに付いた真由美さんの手の跡がとても印象に残つた。タイタニックだ。その記憶は僕自身のもものではなかつた。伊都淵さんのものか、それとも父のものなのか、何であるかと構わない。僕は果たすべき責任が増えたことが嬉しかった。

「見つかったか？」

雄さんと僕はドームを中心に30km圏内の搜索を終えて戻っていた。雄さんの櫛にはどこからか集めてきた食料品のダンボール箱が乗っているだけで僕のホバーも同様、LPGボンベと誠さんに頼まれたガラクタのみが荷物の全てで、生存者はおるか動物の一体も見つけられずに居た。本当に2〜3パーセントの生存者が居るのだろうか。シエルターらしきものを数件見つけたが中に人の気配はなく、これを100km圏に延ばしたところで大した成果はないように感じられていた。僕は力なく頭を振る。

「そうか、市庁舎の地下も避難物資だけが残されていて人の気配はなかった。あの衝撃波では地下に潜る時間さえなかったのかも知れないな。明日は100km圏まで伸ばしてみよう。誠の作った短波無線機の通信範囲はせいぜい50kmだ、危険は伴うが仕方あるまい」

「見つかるでしょうか」

「見つかるんだよ、何としても」

それが終わればいよいよ僕達は旅立つことになる。留守を守る人の数を、出来れば男性の頭数を増やしておきたいと思っていたのは雄さんも同じだったようだ。

おそらく外気温は氷点下30度を下回っていただろう。ホモロチの死骸は腐敗が進むのも遅く、大掛かりな搜索に出る前に氷中行軍に慣れてもらおうと連れ出した智君に大きなシヨックを与えていた。改めてホモロチを觀察すると三分の一程が女性？ 雌？ つまり胸に膨らみがあった。荷物は僕が下ろしておくからと言うと、彼は青い顔をしてドームに入って行った。明日こそ たったひとりでもいい。生存者を見つけれますように。僕はよく晴れ上がった空を見上げた。

一時間進んでは視覚と聴覚を解放する。らしい動きがあれば半径5km圏内ならどちらかのアンテナに引っ掛かるはずだ。しかし何

も動きはない。そして僕達が今日の搜索に出かける前、智君が雄さんに話しているのを聞いた。小野木さんは真剣に探しているようには見えないんですが、常人から見ればそうかも知れない。雄さんは「丈は、あれで必死に探しているんだ」と答えてくれていた。目を凝らし耳を澄ませると、集中のため僕は黙り込んでしまふ。そんな僕に不安を抱いた智君はパーティーを組む相手を入れ替えて欲しかったのかも知れない。

四時間が経過し、搜索範囲を広げても生存者を見つけることは出来なかった。氷のオブジェを掘り起こせば何かしら出てくるものはあるのだが、それが生存者である可能性はゼロに等しい。家族らしい四人が体を寄せて凍りついていたのを見たとき、智君は朝食を全部もどしていた。彼はかなり疲れているようだった。前を行く僕との距離が開きつつある。帰りはホバーに乗せていつてやるか、そう思つて再び視覚と聴覚を搜索モードに戻した時、地響きと共に凄い勢いで前方から迫ってくるものをみとめた。

「猪だつ！ デカイぞ。逃げろつ」

氷の平原に身を隠す場所などない。話しかけてみるか？ いや、そんな余裕はなさそうだ。高校柔道部の主将としてインターハイに出たという智君だったが、185cmの体を凍りつかせたように立ち尽くしている。猪の鼻息は荒く凶悪そうな牙を振りかざしながらの突進だった。選択の余地はない。僕は智くんを突き飛ばしておいて黒い弾丸にタイミングを合わせた。数歩助走して猪を飛び越える。跳び箱の要領だ。目標物を見失つた猪は数十メートル駆け抜けてからヒツメで氷を蹴立てて四輪。いや四足だな、とにかくドリフト気味にウターンしてくる。今度はホバーにもたれかかったままの智くんを狙いを定めて。

殺るしかないか。僕は全速力で駆け出した。ええと……猪の急所は耳の後ろか心臓か。なになに、肋骨の三番目と四番目の間を……って、そんなの探してる暇はない。あの厚い皮脂を見る限りスラッグショットでも命中しなければ突進は止まないだろう。瞬時に猪

に駆け寄った僕は首筋めがけて手刀を叩き込む。何か硬い物が陥没するような感触があった。猪はそのままよたよたと二、三步進むと、どつと横倒しに倒れた。その音で顔を覆っていた両手を開くと、智君が震える声で言った。

「小野木さん……格闘技でもやってたんですか？」

倒れた猪は100kgは優にありそうなガタイをしている。それが時速50kmで突進してきたら大抵の格闘家も逃げ出していただろう。泡を吹いていた口からはみ出した牙も15cmはある。僕だつて出来れば逃げたかったのだが、そうすれば智君とホバーを見捨てることになる。猪には可哀想だが、こうするしかなかったのだ。我々の血となり肉となつてもらうことで成仏してもらおう。確かポタン鍋にするには臭み抜きのため、血抜きをする必要があるはずだ、と猪の後ろ足を持ち上げて気づく。分銅のような物が通されたものが通されたロープが巻きついていていた。

「何だろう？」

原田兄弟

「生存者だっ！」

猪が走ってきた方向から近づいてくるものがある。未だ恐怖から立ち直れてない智君が僕の指し示す方にのろのろと顔を向ける。人影が二つ、台地を滑るような速度だった。ウィンドサーフィンのボードのようにも見える。僕達の数メートル手前、派手なアクションで止まると、開口一番こう言った。

「あっちゃあ、先を越されちゃったかあ」

「ほら見る、風真ふうまの狙いが悪いから上手く両足に巻きついてくれなかったんだ」

片方が猪の後ろ足を指差して言った。

「お前の方が肩がいいから投げろって言ったのは兄ちゃんじゃないか」

「狙って投げろって言ったろう？ 肩はよくても頭が悪いんじゃない、どうしようもねえな」

「よく言うよ。俺は兄ちゃんみたいにテストで0点とったことは一回もないかなら」

驚いたことに彼等は僕達が目に入らないかのように言い合いを始めた。話を聞く限りこの二人は兄弟のようで体格からしてもまだ高校生ぐらいだろう。重りのついたロープを投げて猪が足を取られて転倒したところを何とかしようとしていたらしい。随分と時代遅れな狩猟方法を思いついたものだ。そして彼等にとって生存者は珍しい存在でもないようだった。僕は期待をもって問い掛ける。

「君達はどこから来たんだい？」

「てゆうか、あんた誰？」

兄ちゃんと呼ばれていた方がぶっきらぼうな口調で聞き返してきた。

「僕は小野木丈、そちらが木下智君。生存者を探している。コミュニ

ニティがあるんだ。住む場所も食料も、電気もあるぞ」

「そんなのうちにだってあるさあ」

「黙れっ！」

兄の叱責に弟が首をすくめる。それはこの地方の方言だった。語尾の「あ」が持ち上がるが疑問形ではない。他のコミユニティの住人だということか。僕の期待は膨らんだ。

視覚を解放して彼等の虹彩を調べる。しかしレントゲンの用に瞼を透かして見える訳ではない。ゴーグル越しに覗く二人の目はとても細く、かろうじて青紫に変色した虹彩が見て取れた。

「どこに住んでいるのか教えてくれないか？ 君達他に生存者は？ トコログリアもある、未接種の人はいないか？」

二人の青年は僕らから少し離れると額を寄せ合って内緒話を始めた。しかし数km先の物音を聞き取る僕にとって数メートル先の会話を聞くぐらい何でもない。

（どうする？ 父ちゃんは誰にも教えるなって言ってただろ）

（うん、悪い奴等だったら病院を乗っ取られちゃう可能性もあるもんな）

（でも、鍾乳洞に避難してる人達は、殆どなんとかグリアを受けてない人達だったんじゃないか？ あの人達を助けてあげられるかもよ）

病院？ 地下の機械室にでも住んでいるのだろうか。しかもトコログリア未接種の生存者が居るのだとも二人は言っている。会話そのものは僕達を案内することに積極的ではなさそうだ。僕はこんな提案を試してみる。

「この猪はやろう。運んでやってもいい」

二人の目の色が変わった。

（父ちゃんに相談してみろよ）

（よっしゃ、わかった）

兄の方が短波無線機を取り出す。僕達も持っていた手製のものではなく市販品だった。

(うん、薬は要るんだな？ わかった。ひとりで？ ああ、そうゆつてみる)

無線の向こう側では父親らしき人物が指示を出していた。この世界で生き延びていたのだから、それなりの用心深さはあるようだ。通話を終えた兄弟は再び内緒話に戻る。

(何て言ってた？)

(薬は必要だからひとりだけ連れて来いって。それがダメなら猪と何かを交換する気はないか訊ねてみるってさ。念の為、あの化物を捕まえた罫を仕掛けておくって)

(そっか、だったら安心だな)

兄の方が近づいてきて言った。

「ひとりで来れるか？」

「ああ、それが条件ならそうしよう」

智君に短波無線機を渡して先に帰るようにと告げる。それは智君にとっても渡りに船だったようで、彼は僕が出発するのも待たずに来た道を引き返して行った。

僕はホバーからローラーブレードを出した。兄弟のサーフボードにはホイールが付いており、彼等が来た方向へ向かうとなれば追い風でかなりの速度が出せそうに思えた。トコログリア未接種の人が居るとすればのんびりしてはられない。猪を背負った僕を見た時、兄弟はぎよつとした顔になった。

「ここから20km程先だ。ついてきてくれ」

「こつちは自己紹介したんだぜ。君の名前も教えてくれよ」

「海地^{かいち}だ、原田海地。こいつは弟の風真」

「海地君に風真君か 二人共、勇ましい名前だな」

海地の細い目が笑ったように見えた。

「ちゃんとしてこいよ。はぐれても探しに戻ってやんないからな」
振り向いて言った風真を追い越してゆく。ホバーが巻き起こす風に煽られて体勢を崩しながらも転倒は免れたようだ。意地になって僕を抜き返して行った。

「なあ、兄ちゃん、あいつ力ありそうだぜ。あんなでっかい猪を担いじゃうくらいだもん」

「猪も餌がなくなつて痩せちゃってるんじゃないか？ 見た目程重くないのさあ」

「そうかなあ」

「心配するなつて、ちょっとぐらい力が強くなつてこっちは三人なんだぞ。あんな奴に負ける訳ないじゃん」

先を行く原田兄弟の会話は丸聞こえだったが、知らんふりで後に続く。背負つた猪の臭いが堪らない。僕は嗅覚の伝達を弛めた。バイオナビが正確なら、温泉で有名な或る街近辺を走っているはずだ。伊都淵さんに詰め込まれた地図を頭の中に展開してみる。市立病院を県立病院のそれぞれの位置が投影される。地下に機械室を持つほどの規模なら民間ではないだろうと予測していた。そして原田兄弟は市立病院の方に向かっていているようだった。

ここだな おそらく発電機の音だろう。微かではあるが唸り音が聞こえる。電位にも大きな変化があった。上手く氷でカモフラージュしてあるが、僕の目は誤魔化せない。何よりぱっくり頭の割れたホモローチの死骸が、ここら一带を取り囲んで餌の在処を知らせていた。僕は素知らぬ顔で通り過ぎようとする兄弟に呼びかけた。どうやら罠はもう少し先にあるらしい。仕掛けてあるとすれば落とし穴かむそう網だろう。

「おい、どこまで行くんだ？ 入り口はここなんだろう」

「ちっ、違うさあ」

二人の細い目は正直だ。これ以上ないほど泳ぎ彷徨っていた。

「初対面で信じろつても無理な話だけど、僕は悪さをするつもりはない。ほら、約束通りこれは君達にやろう」

放り出した猪に近づく訳でもなく、兄弟は立ち尽くしている。海地は地下の父親にでも合図を送っているのだろう。さっきからボードの端で氷を叩いていた。僕の見下ろしている部分、氷の扉がゆっ

くりと持ち上がった男が顔を出した。

「こつちの負けだな。入ってくれろ」

言葉に方言が混じるところをみるとそう若くもないようだ。

「ありがとうございます。ですがそれはまた後ほど。猪は置いてゆきますので好きになさって下さい。トコログリア未接種の人が居ると聞きました。どなたか処置出来る方はおいでですか？ もしこちらで処置が出来なければ我々のコミュニティに連れて帰ります。案内して下さい」

「もう下と呼んであるろ。ここにも処置の出来る人間はおる」

顎をしゃくる男の後に続いて階段を下って行く。そこは予想通り病院の機械室だった。五人の男女がストレッチャーに横たえられていた。

「息子さん達の話では、もっと多くの生存者が居たように感じたのですが」

男は兄弟に咎めるような目を向けてから言った。

「鍾乳洞に10人、市庁舎の地下に14人おったんだがな、凍死するかあの化物どもに喰われちまって、迎えに行った時にはこれだけしか残つたらなんだ。おい、出てきてもいいぞ」

男の声で機械の影から中年の女性が姿を現した。

「妻のかおりだ。看護学校で講師をした。薬をもらおうか」

僕は猪の臭いが染み付いたりユックを下ろし、トコログリアとカテールを取り出す。男の妻が手早く処置にかかった。男が顔を覆っていた布切れを外す。頬には大きな傷跡があつた。

「むそう網でとつ捕まえたのが死んだふりをしてやがってな。そんな時に引つ搔かれたんだ」

僕の目線に気づいた男はそう説明してくれた。

「そうでしたか……」

「コミュニティがあるってか？ 発電機の燃料も食い物もそろそろ底を突く。ここに居る全員を引き取ってもらえるなら移ってもええよ」

「是非、いらして下さい。息子さん達のボードを改造されたのはご主人ですよ。今はそういった能力をお持ちの方が貴重なんです」

「化物はみんな死んだのか？」

「ええ、第一世代は」

僕のその答えは伊都淵さんを真似たものだった。あれで終わってくればいいと願ってはいたが、反面あれで終わりにはならないだろうとも思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0921y/>

エウロパの旅人 日本再生篇

2011年11月10日07時07分発行